

19世紀後半フランスの女性像とバレエ —女性向けモード誌 *La Sylphide* の記事に 着目して—

お茶の水女子大学大学院
丹羽 晶子

I. 研究目的と方法

19世紀は、新聞や雑誌などのメディアが盛んになった時代である。日刊紙など多くの新聞、雑誌は主に読者対象が男性であったが、モード誌については、上流階級の女性向けの読み物として刊行されていた。当時のモード誌は、ファッション関連の記事だけでなく、劇場欄をはじめとした、文化生活に必要な様々な記事が掲載されていた。本研究では、当時の女性向けモード雑誌に掲載されるバレエについての記事に着目し、読者の女性に向けて、バレエがどのように表象されていたのか明らかにすることを目的とする。1873年10月18日に刊行されたモード誌 *La Sylphide* に掲載された Léo Lespès (1815-1875)による記事「オペラ座の女性ダンサー」を中心に考察を行う。

II. 結果と考察

1. 19世紀後半の女性像の変化と女性ダンサー

i) 女子教育

フランスの19世紀前半の上流階級の女性は、幼い頃に修道院にて教育を受け、若くして親の決めた相手と結婚することが多かった。しかし、1870年代以降公教育制度が整備されると、それまで軽視されていた女子教育が改善され、ブルジョワ階級の女性を中心に、中等教育や高等教育の分野に参入するようになり、社会の一単位としての女性になることが求められた。

ii) 女性像の変化

フランスの19世紀前半の理想の女性像は慎ましく羞恥心に満ちた処女、貞淑で献身的な良妻賢母であった¹⁾。さらに、文学、芸術作品に登場する女性は、若く、身体性の極めて希薄な女性であった。しかし、19世紀後半になると、若い女性の描写が「身体性の希薄な天使的人間から身体的な存在感を濃密に漂わせる人間へ」²⁾と描き変えられていった。

2. モード誌 *La Sylphide* の記事にみる

女性ダンサー評の変化

モード誌 *La Sylphide* に掲載された女性ダンサー評にも、時代による描写の変化が見られる。オペラ座の女性ダンサー Plunkett について、彼女のオペラ座デビューを扱った1845年3月22

日の記事では、その容姿については、大変美しいとだけ言及されるのみで、容姿の具体的な表現は見られなかった。一方で、1873年の記事では、「美しく散らばった髪、持ち上げられた胸、へとへとになった体、一度にいくつかの笑顔が浮かべるかのように、唇は開いていた」と Plunkett の身体描写がより具体的に行なわれており、舞台上で踊る女性ダンサーの生々しさが表現されていると言える。

3. Léo Lespès による記事

「オペラ座の女性ダンサー」

Lespès は、記事の中で、オペラ座のバレエには、古くからの踊りが持っているような道徳性がないと主張しており、女性ダンサーを、「(つま先で立っているために)、耐えがたい苦痛に従事している若い女性」と表現している。また、Plunkett の踊りを回想し、「伝統に倣ったものではなかったかもしれないが、ずっと魅力的であった」と書いており、バレエを俗なものとしつつも、その魅惑的な踊りに惹かれる様が示唆されている。Lespès は女性ダンサーの身体描写を具体的にすることで、より性的な目で見られる女性ダンサーという構図を強調しているように見受けられる。

III. まとめ

モード誌 *La Sylphide* の記事から読み取る19世紀後半におけるバレエの様相、女性ダンサー像は、19世紀前半とは変化していることがわかる。女性の憧れや理想像として描かれていた女性ダンサー像が瓦解し、より人間的で、現実的な女性として描かれ、男性から性的な目で見られる女性ダンサー像が強調されていることが指摘できる。1870年代以降、それまで軽視されていた女子教育が改善され、バレエやバレエダンサーが憧れを抱く対象ではなくなったということが現れていることが考察される。19世紀後半における女性像の変化についても、フランスにおけるバレエの衰退の一要因になっていた可能性が浮かび上がる。

主要参考文献

1) イズリーヌ、アニエス

2010 『ダンスは国家と踊る—フランス コンテンポラリー・ダンスの系譜』岩下 綾/松澤 慶信(訳) 東京：慶應義塾大学出版会。

2) 小倉、孝誠

2018 「若い娘たちの表象：魂から身体へ」『慶應義塾大学日吉紀要』フランス語フランス文学 No.67, p.33-56。